

---

# 今日で騎士王辞める！

雄生 麻乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今日で騎士王辞める！

### 【Nコード】

N9312S

### 【作者名】

雄生 麻乃

### 【あらすじ】

俺は、今日騎士王になるはずだった。

がしかし！其処には大きな罠が待ち受けていた！（笑）

注：これは舞傘 真紅染さんの「今日で〇〇辞める！」シリーズの四次創作です。

よく晴れた日の朝。

辺りの街と比べ、巨大な存在感を放つ城の広間で、今まさに戴冠式が行われていた。

「我らが騎士王に永遠の栄光あれ！」

「『『『『栄光あれ！』『』『』『』』」

俺は、その戴冠式では一応、冠を戴く役を担っている。つまり、これから騎士王になる者というわけだ。

が、目の前で幼いころからの重臣が、何やら唱和したり、他の家臣や一般の市井の民がそれに続くようにして叫んでいるのには全く興味がない。

野郎が野太い声で何叫んでようが、耳障りなだけというのは、俺以外の人でも思ったことぐらいはあるはずだ。

おまけにそれに続く叫びは、総勢約一万を超えるであろう家臣＋観客が全力を振り絞って喉を震わせているわけだぞ？

その中心にいる俺にとっては、まさに鼓膜が数千回は破れるかというほどの、大音響地獄に他ならない。

もつとも、実際には何回破れようが、数時間前に手にした、持つ者に勝利を与える選定の剣と、全ての怪我や老化すらも防ぐ、鞘のおかげで平気なのだが、あまりに長く続く地獄に、いつそ自分で鼓膜をびりびりに破り捨ててやろうか、と思いたくもなる。

「よって、我らが騎士王、今ここに誕生する！」

「イエ~~~~~イ！」

重臣が声高に宣言すると、会場から割れんばかりの歓声が響き渡った。

実際、辺りの壁に若干ひびが入ったんじゃないか？どれだけの音量なんだよ。魔法の掛けられた広間の壁にひび入れるなんて。

「これにて、騎士王選定の儀を終了する」

お、どうやら終わったみたいだな。予定なんて全然覚えてないんだから、この間にこっそり抜け出して入口からパンフレットをくすねてきた方が良かったかもしれない。

で、次は何が起こるんだ？

「ではこれより、戴冠の儀を前に、騎士王からこれからの政策や、他の候補者を押しのけて勝ち上がってきたことなどについて、一言頂きます！」

「おおおおおおおっ！」

観客のテンションはもう上がりにながって、辺りをすさまじい熱気が包む。

うん。そのせいで俺、今軽い熱中症にかかったようだ。だからあいつの声を聞き間違えんだな。あーやれやれ。オッそろしいねえ、熱中症って。

俺もこれからはかからないように気をつけよう。

時系列がばらばらな考えなんじゃないか？とか、全ての身体の変化を防ぐ魔法の鞘の効果で熱中症になんかならないんじゃないか？とかまともなことを囁いてくる心の中にいる天使の声は黙殺する。

今の俺は、悪魔の声こそが正しいと思っている！

「さ、騎士王！早くお言葉を！」

……ふう。どうやら現実逃避はここまでのようだ。

ったく、面倒なことをさせやがって。

だいたい騎士王ってなんだよ。普通の王でいいじゃないか。

赤いじゅうたんの敷かれた通路を、ゆっくりと歩いて祭壇に登る。

観客は、期待に満ちた目でこちらを見つめ、元騎士王候補は恨めしげな視線を送ってくる。

やれやれ、候補者選出の試合のときに手加減してわざと負けておくとか、選定の剣を石から抜くときに抜けないふりをするとかしておけばよかったな。

ま、ここまで来たからには覚悟を決めなければならんが。

「あー。ども。騎士王っす。政策については家臣に丸投げで。俺、完全に武闘派なんで」

しーん。

せつかくウケを狙ったのだが、俺の予想とは反対に辺りを重苦しい静寂が支配する。

さっきのむさくるしい会場のテンションが一気に冷め、今度は逆に氷点下まで下がったようだ。

んなことしてるお前ら絶対、今日は体壊すからな！見てろよ、コンチクショウ！

「ふざけんなー！」

「お前何様のつもりだ！」  
「ひっこめ脳無し！」

観客たちが一斉に切れ出し、投げつけられた石ころや果物なんか  
が飛来する。

というか、よくそんなの持ってたな！とツツコミながら、鞘から  
抜いた選定の剣で斬り飛ばしたり弾いたりして全てかわす。

何気に激怒して斬りかかってきた元騎士王候補については、全員  
左手に持った鞘で殴りつけて意識を奪っておいた。

この日のためにあの重臣に自腹で買わされた高級なこの服に、果  
汁や傷をつけられてたまるか！

が、まだまだ怒声と飛来する色々な物の雨は、止まない。

「ふざけるんじゃないぞ！」「こちらに至って大真面目じゃボケえ  
！」

「俺たちの貴重な果物を！」「だったら投げんじゃねえ！他の奴ら  
見習って石ころにしとけよ！」

「あのバカ高い入場料返しやがれ！」「んなもん取ってたのか！そ  
れは俺の責任じゃないし全額払い戻すわ！」

「あたしたちの怒りはまだまだ尽きないわよ！」「どんだけ持って  
んだよ投げる物！」

一万人分の飛び道具による攻撃を全て防ぎつつ、怒声には丁寧な  
怒鳴り返す。

が、途中聞き捨てならないセリフが聞こえて、キツと重臣の方を  
睨みつけるが、オロオロと右往左往するばかりで役に立ちそうもな  
い。

十五分ぐらいは、その争いが続いただろうか。

ようやく敵（認識が途中から変わったぜ）の残弾が尽きたみたいだが、こっちの体力も限界だ。

ホッと胸をなでおろした時に、バァーン！とドアを蹴りあける音がして、これまた無駄にでかい声で、侵入者がとんでもないことを告げてくれた。

「皆！もうジリ貧か？予備の果物持ってきてやったぞ！」

「どんだけ！？もう俺、騎士王辞める！」

俺の涙交じりの悲鳴は、最早怒りというより、楽しんでいるような観客の歓声にかき消された。

(後書き)

コメディーって難しい・・・。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9312s/>

---

今日で騎士王辞める！

2011年5月2日16時55分発行